

『逢坂越えぬ権中納言』題名考

——「安積の沼」と「淀野」をめぐって——

井 上 新 子

はじめに

堤中納言物語中の一編『逢坂越えぬ権中納言』の末尾は、

宮は、さすがにわりなく見えたまふものから、心強くて、明けゆくけしきを、中納言も、えぞ荒だちたまはざりける。(中略)

うらむべきかたこそなけれ夏衣うすきへだてのつれなきや
なぞ

と結ばれている。恋慕う相手と間近に対面しながら、ついに契りえなかつた権中納言の姿がそこにある。題名の「逢坂越えぬ」は、こうした彼の姿を象徴したものだとする見解が一般的である。

ところで、本物語は大きく二つの部分から成っている。根合とその後が続く管弦の場面を主とする前半では、主人公権中納言の今を時めく貴公子ぶりが描かれ、その華やかさとは一変して、後半では彼の宮の姫君への悲恋が記された。

小論では、この前半と後半の対照という事象に眼を凝らすと、題

名の「逢坂越えぬ」に従来考えられてきた意味の層に加えて、もう一つの連想の糸がみいだせるのではないかということをし、いささか述べてみたい。

一

前半部における、権中納言活躍の中心となっている根合の記事をみてみよう。

根合の当日、権中納言はそれまでの気乗りのしない様子とは裏腹に、立派な菖蒲の根を携えて登場した。

中納言、さこそ心に入らぬけしきなりしかど、その日になりて、
えも言はぬ根ども引き具して、参りたまへり。小宰相の局に、
まづおはして、「心幼く取り寄せたまひしが心苦しきに、若々
しき心地すれど、安積の沼をたづねてはべり。さりととも、負け
たまはじ」とあるぞたのもしき。いつのまに思ひよけること
にか、言ひ過すべくもあらず。

彼は、大人げない気はしましたが、(菖蒲の根を求めて)「安積の沼」を尋ねました、と言う。豊かな才能に恵まれながら、何ごとにも「つれなき」態度を崩さない、そんな彼が、珍しくはるか陸奥の「安積の沼」までも菖蒲の根を求めた。そうした自己の懸命な行為に対する照れ臭さが、「若々しき心地すれど」の言に表れたのだらう。

この「安積の沼」探索の話題は、物語の中にもう一度出てくる。

左

君が代のながきためしにあやめ草千ひろにあまる根をぞ引
きつる

右

なべてのと誰か見るべきあやめ草安積の沼の根にこそあり
けれ

とのたまへば、少将「さらに芳らしものを」とて、

いづれともいかがわくべきあやめ草おなじよどのにおふる

根なれば

とのたまふほどに、

根合が終わって歌合となった時に、詠出された歌である。「なべて
のと」歌では、「安積の沼」の菖蒲の根の素晴らしさが詠み込まれ
ている。対する「いづれとも」歌では、その菖蒲の根は実は「安積
の沼」のものではなく、こちらの菖蒲と同じ「よどの（淀野、山城
国）」に生えていたものだから、双方の根は優劣のつけようが
ない、としている。権中納言は、結局のところ「安積の沼」ではな
く、近場の「淀野」で菖蒲の根を調達したらしい。

菖蒲の根の入手先をめぐる、「安積の沼」と「淀野」が取り立
てられている。これら「安積の沼」と「淀野」が記される意味を考
えたいのだが、その前に、この二つの地名について、主として菖蒲
との関わりを通していくらか記しておきたい。

二

周知のように、「安積の沼」は陸奥国（福島県）の歌枕である。
「俊類鱸脳」には、

五月五日にも、人の家にあやめをふかて、かつみぶきとて、こ
もをぞふくなる。かの国には、むかし、しやうぶのなかりける

とぞ、うけたまはりしに、このころは、あさかの沼に、あやめ
をひかするは、ひが事も申しつべし。

とあり、彼の生きた時代には「安積の沼」に菖蒲が無いという伝承
が存在していたことが知られる。こうした伝承の延長線上にあるの
が、「今鏡」や「無名抄」に載る実方説話である。 「安積の沼」
は花がつみの名所として有名であり、実方が下向した折り、五月の
節句の菖蒲がないので花がつみを葺いたという話である。

こうした伝承の流れが認められる一方で、「安積の沼」の菖蒲を
詠んだ歌も数は少ないながら確認される。

・「小大君集」

くすだまをんなのもとにやる、をどこにかはりて

一八 ぬまごとにそでぞぬれぬるあやめくさにころににたるねを
もとむとて

返し、きよはらどのの女御

一九 くるしきになにもとむらんあやめくさあさかのぬまにおふ
とこそまきけ

・「伊勢大輔集」

ひさしくおとせぬ人のもとより、五月五日

二七 ひきやらぬふかみにおふるあやめぐさあさかたにや人の

いふらん

かへし

二八 あやめぐさあさかのぬまにひくめれば今日ばかりなるうき

ねとぞ見る

前者は、贈歌をうけて相手の心の浅さを皮肉るかたちで「安積の沼」が出てきている。後者も同じく、相手の心の浅さを「安積の沼」に掛けている。両者とも「安積の沼」は、菖蒲の名所としてとりあげられているというよりも、同音の「浅（い）」を引き出すための語としてより重く機能しているように思われる。

ただし、これらの歌の時代より少し後になると、

・「郁芳門院根合」寛治七年（一〇九三）五月五日

左 先読

三 あやめぐさひくてもたゆくながきねのいかであさかのぬまに

おひけむ

右

四 君がよのながきためしにひけとてやよどのあやめのねざしそ

めけむ

・「中宮権大夫家歌合」永長元年（一〇九六）五月三日

四番 左

齋院撰津君

七 あやめぐさあさかのぬまにおふれどもひくねはながきものに

ざりける

右 勝

八 たぐひなきためしにひかむあづまぢのねをながぬまにおふる

あやめを

高階遠仲

といった例もみられるようになる。これらは、「安積の沼」でとれる菖蒲の根の長さを詠んでいる。つまり、菖蒲の名所としての「安積の沼」がクローズアップされているのである。つがえられた、「郁芳門院根合」の右歌の上の句「君がよのながきためしにひけとてや」、及び「中宮権大夫家歌合」の同じく右歌の上の句「たぐひなきためしにひかむ」は、「逢坂越えぬ権中納言」の

君が代のながきためしにあやめ草千ひろにあまる根をぞ引きつる

の影響下に成立したものでらしい。⁹⁰「逢坂越えぬ権中納言」では、この「君が代の」歌と、「安積の沼」の菖蒲を詠み込んだ「なべてのと」歌とは、歌合の左右として詠出されたものであった。

前掲の「俊頼髓腦」からは、俊頼が陸奥の国には菖蒲が無いと考えていたらしいと知られた。彼はさらに、「このころは、あさかの沼に、あやめをひかするは、ひが事とも申しつべし」とも記している。この「このころ」の例が、「郁芳門院根合」の雅実歌や「中宮権大夫家歌合」の齋院撰津君の歌であったのだろう。ただし、俊頼はこうした見解を持つ一方で、「安積の沼」の菖蒲の歌を詠んでも

いる。

あさかのぬまのあやめといふことをよめる

二九一「あやめかるあさかのぬまに風ふけばをちの旅人袖かをるか

な

二九二「あやめ草かげみなそこになみよりてあさかのぬまもふかみ

とりなり

(『歌本奇歌集』)

「安積の沼」に関しては、菖蒲をめぐってこのように相反するとも言うべき発想の流れがみてとれる。こうした状況を反映してか、かの地を菖蒲の名所とするか否かは、現代の注釈でも微妙に意見が分かれる。菖蒲の無い沼とするならば、権中納言の「安積の沼をたづねてはべり」という発言は、一種の諧謔をこめた表現だとみることもできよう。

『逢坂越えぬ権中納言』が創られた天喜三年(一〇五五)時点では「安積の沼」が菖蒲の名所として知られていたのかどうかは微妙な問題で、結局残念ながら判断がつかない。ただし、この時までには菖蒲の産地としていくらか和歌に詠まれた痕跡があるのは、「淀野(最も多くみられる)」「安積の沼」「筑摩江」等であった。『筑摩江』は同時代人から生まれた発想である上に、近江という近場である。遠くまで懸念に探してきたという意味合いを出すためには、「安積の沼」が最適だったのであろう。

三

「淀野」は、「夜殿」を掛けて用いられることが多い。

『俊頼髓脳』には、実方の「みかのよのもちひはくはじわづらは

し聞けばよどのにははこつむなり」という歌に関する記述の中に、

よどのに、といふは、常の寝どころをいふなり。

とある。こうした「淀野」と「夜殿」の掛詞の例として他に、

・『後撰和歌集』卷第十三夏五

しのびてまでまできる人の、しものいたくふりける夜ま

からで、つとめてつかはしける (よみ人しらす)

九一四おく霜の暁おきをおもはずは君がよどのによがれせましや

・『拾遺和歌集』卷第二夏

(天曆御時御屏風に、よどのわたりする人かける所に)

一一四しげることまこもおふるよどのにはつゆのやどりを人ぞ

かりける

等がある。

さらに、この「よどの(淀野・夜殿)」に、菖蒲の根をとりあわ

せた歌もかなりみられる。

・『後十五番歌合』

六番

六番

一一 引きわかれたもにかくるあやめ草おなじよどのにおひに

齋院宰相

しものを

・『後拾遺和歌集』第三夏

右大臣中将にはべりける時歌合しけるによめる

大中臣輔弘

二二二ねやのうへにねざしとどめよあやめぐさたづねてひくもお

なじよどのを

先にも記したように、「淀野」は菑蒲の名所として有名であった。

四

かなり回り道をしてしまったきらいもあるが、権中納言の菑蒲の根探索をめぐって話題にのぼる「安積の沼」「淀野」の文学的背景を確認したところで、本題に入ろう。

題名の「逢坂」は、男女の一線を象徴する語であるのだが、地名としての「逢坂」は、周知のように都と「人の国」との境と認識されていた。「安積の沼」はこの「逢坂(の関)」を越えてはるばる行ったところにある。これに対して、「淀野」は京の都の近郊に位置する。物語前半部の中心的行事である「根合」において、権中納言は菑蒲の根を尋ねて、「淀野」には行ったが、「逢坂(の関)」を越えて「安積の沼」へは実のところ行かなかつた。「逢坂」はこのように、「男女の一線」という比喩的な意味の層と、実際の地名としての「逢坂(の関)」という意味の層の両方が込められた物言いであったのではなからうか。また、物語後半部の趣向としては、

姫宮の寝所「夜殿」に忍び込んだものの、「逢坂」(男女の一線)を越えられなかつた権中納言、という設定がみえてくる。

つまり、「逢坂越えぬ権中納言」という物語は、「よどの」(淀野へ前半V・夜殿へ後半V)には行ったが、「逢坂(の関)」(地名へ前半V・男女の一線へ後半V)は越えられなかつた権中納言、という構図を持っているのである。したがって、題名は以上のような物語内部の対照を内包した命名であったと言えるだろう。

おわりに

堤中納言物語中の諸篇をみると、題名に二重三重の意味の込められているものが少なくないという事実が気づかされる。

例えば、「花桜折る少将」(「花桜折る」については、「単に花を手折る意」「はなやかに装う意」「美女を手に入れる意」と諸説あるが、むしろ、それらいくつかの意味の層を本来備えるためにとつた暗示的表現として理解したい)や「このついで」、「思はぬ方にとまりする少将」(「少将」は、少将・権少将の両方を指す)、「はいずみ」^[1]等である。

堤中納言物語の諸作品は、実にさまざまな意匠が凝らされている点に物語としての方法上の一つの大きな特質があり、そうした趣向の様相の掘り起こしが作品解明のために必要であろう。小論で問題にした題名の多義的なおもしろさも、そうした追求の一階梯に位置づけたい。

[注]

- (1) 小学館日本古典文学全集。以下、「逢坂越えぬ権中納言」の引用は同書に拠る。
- (2) 三谷邦明氏はさらに、「伊勢物語」六十九段、及び「源氏物語」若菜上巻の光源氏と朧月夜との出会いにおける「逢坂越えぬ」という言葉に注目している（『物語文学の方法』Ⅱ）所収「堤中納言物語の表現構造——引用・パロディ・視線あるいは「逢坂越えぬ権中納言」の方法——」。
- (3) このような物語内部に認められる対照について、大倉比呂志氏は「「逢坂越えぬ権中納言」の構成——意味転換による相関性——」（『解釈』三五卷一〇号、一九八九年一〇月）の中で、「「公と私という相反する世界での主人公像の対比の妙味が主題を際立たせる」という見解は、根合から同音の寝合への意味の転換を欠落させているのであって、極めて単純な二項対立の図式としてしか受け取っていないことにならう。」と述べている。
- (4) 後に述べるように、実際は行っていないのであるが。
- (5) 地名でなく、沼地とする説もある。
- (6) 小学館日本古典文学全集。以下、「俊頼髄脳」の引用は同書に拠る。

- (7) 新編国歌大観。以下、和歌の引用は同書に拠る。
- (8) 「郁芳門院根合」の歌については、小学館日本古典文学全集「堤中納言物語」の注に指摘がある。

- (9) 天喜四年（一〇五六）頸房家歌合。
- (10) 増田夏彦氏「「堤中納言物語」についての一考察——「花桜折る少将」の問題点をめぐって——」（『岡大國文論稿』二五号、一九八七年三月）においても、同様の指摘がある。
- (11) 拙稿「人に「すみつく」かほのけしきは——平中の妻と「はいずみ」の女——」（『国文学攷』一四二号、一九九四年四月）

（いのうえ・しんご、旧姓 米田）
——日本学術振興会特別研究員——